

増田の歴史ある商家地区

増田の歴史的な商家地区は、古くから商人の町として栄えてきたことを物語っている。増田は、日本列島の中でも雪の多い地域にありながら、17 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて繁栄した。この雪国での長い繁栄の歴史は、増田の住宅に見られる独特の建築様式である「内倉」に反映されている。この特徴的な土蔵は、伝建地区のメインストリートにあるほとんどの住宅に見られ、その多くは現在も個人の住居として、代々商人の家系に引き継がれている。

増田が経済の中心地として成功したのは、皆瀬川と成瀬川の合流点、そして小安・手倉両街道の分岐点という好立地にあったからだ。川は物資の流通を効率的にし、街道は増田と仙台藩を結び、そこからさらに江戸（現在の東京）に行くことができた。1600 年代に入ると町の経済は繁栄し、19 世紀後半には増田は秋田県でも有数のたばこと絹の生産地となった。1900 年代初頭には、近くの吉野で豊富な鉱床が発見され、9,000 人もの労働者が増田に集まったことで、増田はさらなる経済成長を遂げた。

増田の朝市

増田の貿易・経済活動の歴史は、1643 年に朝市（あさいち）が誕生したことに始まる。この朝市は、増田が主要な河川や街道へのアクセスに恵まれていたことを認識していた地元政府から認可されていたものである。朝市を訪れる人々は、地元の農産物などを購入するだけでなく、ニュースや商売の情報交換の場としても重要な役割を果たしていた。

朝市は多いときには 1 日おきに開かれ、通りの両側に数十軒の店が並んでいた。その後、経済状況や消費者のニーズも変わり、朝一の規模は縮小したが、現在も朝市は毎月 2、5、9 のつく日に開催されている。

切妻屋根の商人屋敷

街のメインストリートである中七日町通りに建ち並ぶ伝統的建造物は、切妻屋根の中央に棟があり、通りに対して垂直になっているのが特徴である。このデザインは、雪の多いこの地域の気候に適したもので、玄関から離れた側に雪を落とすようになっている。各住居には、建物に沿って伸びるトオリドマ（土間の廊下）がある。トオリドマの奥には内蔵と呼ばれる大きな室内倉庫があり、その先には小さな庭に通じる扉があり、屋外倉庫（外蔵）、そして敷地の境界を示す門がある。ほとんどの住宅の幅はほぼ均一で、奥行きは約 100 メートル。このような細長い建物が並んでいるのが増田の歴史地区の特徴である。

1975 年、歴史的な建物や町並みを活かすまちづくりを開始し、2013 年、横手市はこの増田の 10.6 ヘクタールを「伝統的建造物群保存地区」に指定した。